

作っていたからである。

また地域における子供・学童の教育にも意を用い、当時の小学校男児を集めて悟真寺で「学友会」を始めた。その他大人はもちろん青年層・婦人会・少年たちに至るまで、浮立・七福神・川神祭り・荒神祭・ほんげんぎょう・初午等伝統的で楽しい諸行事を励行してきた。これらの美しい村の行事も時代の変遷に伴ってほとんど姿を消したが、最近になってこの村に「浮立」が見事に復活された。この村のは天衝舞浮立の伝統を踏むものであるが、徳久弘を中心に村の長老・先輩等が指導者となり農閑期を利用して練習と花笠や衣装作りが每晚続けられた。昭和五十七年五月前町長故碓辻次郎の胸像除幕式が役場の広場で挙行されたが、これを祝福して初めて公開され、華麗壮厳な浮立の舞が晴れた五月の空の下で脚光を浴びたのである。

一八 下 飯 盛

下飯盛は中飯盛の直ぐ南部に隣接しており、その下に位置することから「下飯盛」の地名が生まれたものと思われる。南北に長い集落であるが、その中央に八幡神社を祀り北部に開田庵、南部に龍田寺と地藏院の三カ寺を擁して昔より民家も相当に多かつたのである。

慶長絵図によれば下飯盛は、佐賀平野の南限集落として、「二千三十七石九斗二合」とある。この飯盛は現在の佐賀市木庄町の上飯盛と見られ、戦国時代の開拓地であろう。下飯盛は上飯盛の直ぐ南部に在るところから、上飯盛からの移住によってできた干拓村で、正保絵図に「下飯盛村」と見える。万延元年（一八六〇年）の郷村帳には、中飯盛村の小字として「大屋舗小路・江副小路・辻小路」とあり、下飯盛村の小字には「長八小路・石丸小路・山田小路・道手小路」と記されている。

佐賀県の歴史では、七〇八〇年前はこの辺一带は海だったらしく、飯盛から北部を小津郷という海岸であったとのことである。佐賀郡誌の一節に次のような記事が載っている。

「上飯盛は字の如く、上飯を盛るという意義にて中古時代は飯盛以南は一面筑紫瀉なりしが、現今の東与賀即ち大野・住吉・新村の海面埋築の際は、新地方の役所を置き飯の炊出方を為し、之を盛りて公役へ配付せしと云う現今の与賀高等小学校の敷地となり」とあるように、お上のご飯を盛ったことから名がついたという。上飯盛の下に村ができたのを下飯盛といい、その中間を中飯盛と呼ばれたと思われる。

ある資料で当村落内の寺院の創立を調べたら、龍田寺の創建は今を去る約五一〇年前、文明二年（一四七〇年）に梅屋和尚を開山として始められ、開田庵の建立は享保二年（一七一七年）となっているから今から約二七〇年前、佐賀龍泰寺の高弟峰月圓澄和尚を法地開山としたとある。当時この開田庵の一带は瀉地で満潮の時は漁舟が入りしたが、後には土地を住民が開いて田畑を作り庵を建立し「開田庵」と名付けたとあること等から、この辺一带は自然埋没や干拓などによってでき上がったことが証明される。

敬神崇祖

古来この住民は敬神崇祖の念に富み、ほぼ中央に守護神の八幡神社を祀り、北部と南部には開田庵・龍田寺・地藏院の三寺を開いて豊かな生計を立てて来た。これらの詳細は「神社・仏閣」の欄に譲りここでは「八幡神社」の概略だけについて述べたい。

八幡神社

東与賀町内では明治以来村社の一つとして、神社の本殿・拜殿・社務所等も堂々たるもの、境内も広大で四四一坪もある。戦前から戦中にかけては武運長久の守り神としても村内外の崇敬篤く、当地方随一の参詣者が多かった。昭和二十年まで東与賀村よりは、神饌幣帛料供進の指定を受けており、祭典には学校の児童・生徒も教師に引率されて参拝した。昭和十一年十二月には村社より昇格して、郷社への申請書を佐賀県知事に提出されたが、不幸にも敗戦となり遂にその実現を見なかった。しかし昭和四十九年はこの八幡社がこの地に御遷座されてから満一〇〇年の意義ある年であった。この記念すべき年を迎えて、当時八幡神社総代御厨勇をはじめこの村の長老等が中心となり盛大な御遷座一〇〇年祭が挙行されたのであった。

鍋島侯爵家佐賀内庫所保存記録および当社保存の資料によると左記のような由緒が分かる。

この八幡神社は文治元年（一一八五）源頼朝の弟範頼が九州へ下向の際、家来の河野四郎道信に武運長久祈願のため、鎌倉の鶴岡八幡宮の分霊を此所に勧請されたのである。「此所」と伝うのは現在本庄町上飯盛の「衆議院

議員中野実誕生地」記念碑の在る付近である。中野実はこの八幡神社の宮司の子息で、後代議士に当選したのであった。この土地から下飯盛の現地へ御遷座になったのは、明治七年（一八七四）で、その祝典には下飯盛地区民が浮立を打ってお迎えしたのである。その事はこの浮立の「モリヤーシ」に出演した幼児の中に、宮崎義三（慶応三年生）や福岡峰吉（明治元年生）が証言したらしい。御遷宮は現在地の境内大楠の南で、当時この近くに下飯盛矢房社や稻荷社があった神域だったのである。

その後は当社保存記録によると、「大正三年会計指定、昭和三年十一月三日八幡社遷座五十年祭、昭和五年三月八日東与賀村の村社に昇格されて幣帛供進指定、昭和十一年六月一日神殿・幣殿・拜殿改築落成」となった。この落成式は東与賀全村を挙げての祝典となり大賑わいがあった。これに要した経費は当八幡社に代々因縁の深い中野実家より多額の寄付と下飯盛・中飯盛・大野の大字飯盛の氏子をはじめ、村内外の本村出身者などからの寄付金で賄ったのである。また神社に必要な鳥居・幟台・献燈（二基）・狛犬（東西）・手洗石等も、敬神崇祖の念に富む氏子や町村民によつて献ぜられ格式高い境内を備えている。また新築に際して貢献された中野実翁の顕彰碑もこの境内に建てられて、永久にその遺徳を偲んでいる。

ところがどこの村落のお宮や神社境内にも、庚申・地藏尊等いろいろ合祀されてあるが、この八幡神社には全くそれらを見当たらないのが大きい特徴とされる。その代わりに楠の大樹が一本空高く亭々とそびえ立ち、広々たる神域に静寂な木蔭と爽やかな涼風を送ってくれる。根幹も廻廻りが大きく樹齡三五〇年と想定されており、佐賀県名木の一つに指定保護されている。

この下飯盛には、寺院仏閣としては、開田庵・龍田寺・地藏院の三カ寺がある。東与賀町内で一つの小邑に三カ寺もある所は外にはない。しかも開田とか竜田とか、地藏等、土地や水田の名のつくものばかりで、当地方が土地の開拓や水田の構成によりできたものである証拠ともいえる。

興文小学校発祥の地

東与賀小・中学校の元祖は興文小学校であるが、その発祥の地は現在江原益雄の住宅付近にあつた興文塾である。同氏の談話を総合すると、その祖父の時代で建物はコの字型四〇坪の平屋で木材もけやきを用い、屋根は本瓦ふきの堂々たるものだったらしい。この興文塾と住吉のやつすん学校が明治二十一年に合併し「尋常興文小学校」として創立発足したのである。この時興文塾の建物は大部分を当時の小学校へ移転し改造築された。その一部は現在の小学校が新築される以前まで運動場の東部で、宿直室・使丁室の南側に一教室以上の広い建物があつた。これに玄関や床の間をつけて戦前より戦後にかけても、かつての「興文館」の名称で、PTAの諸会合や參觀・視察者の接待施設に変身したのである。

強い共同体意識

この集落には古くから独特の習慣と規則があつて、結婚は必ず他村落民を相手に決め、しかも本人の希望や選択よりも、ほとんどが見合い結婚が多くその場合もむしろ両親の希望や意見が重視された。葬儀にしても明治・大正の初期まで土葬が多く、火葬には付しなかつた。それだけに敬神崇祖の觀念が強烈で、満州事変や支那事変の際この村落より出征兵士は勿論、毎年の陸海軍の入営時には、全村落民が八幡神社に集合し神酒を頂いて武運長久を祈願した。

この郷土の八幡神社だけでなく、毎年の丑うしの日には、小城町の清水権現や田植え前には大川市の風浪神社に、また九月の暴風祈願には三養基郡の綾部神社や正月二日には金立町の金立神社と福岡県の英彦山参詣等を励行して、家内安全と共に五穀豊饒を祈念した。

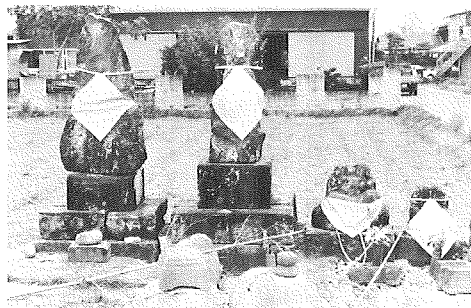
こうした良き環境に恵まれて、子供たちの学業成績や体育運動は極めて良好で、公民館の壁間にはそれらを示す表彰額が所狭しとばかりに並んでいる。これらは戦前や戦後の栄誉の額縁であるが、国語・算数のテスト成績第一位、体育大会の総合や継走の優勝その他戦時中の桑の実採集や螟卵採りの表彰額等、当時の子供たちの努力を物語っている。

下飯盛
また当時の青年層では馬耕技術・深耕技法を磨くために、盛んに「競犁会」が各地で開催された。野田正昭（現在町議会副議長）は、当時村青年団の総務部長を務めていたが、この馬耕にも特技を有し県大会・九州大会にも

優勝、遂に神奈川県平塚で開催された「御前馬耕」の全国大会に出場し、見事に一等賞の栄冠に輝いたのである。

水げんかとかんかん石

この下飯盛とその南方に存在する中村や住吉、特に最南部に位置する大野とは堀水の流通問題で、たびたび争って喧嘩が繰り返された。堀水の流れる分岐点は、この村落の南部に懸った三つ橋で、この三つ橋（流れが非常に速い）を中心にして、昭和十五年頃から四十年にかけ毎年水喧嘩が続いた。当時の故山田八郎村長の頃が一番ひどく大野の故横尾半次外有志の方々に随分と世話をかけた。その頃の農民としては、一番切実な問題はこの用水問題であり、堀・クリークの上流と下流に住む村落民の間に水利上の相反目は当然でもあった。そのために村役場としても相当の予算を組んで、堀の川さらえを各村落に奨励したが、年々と村内の堀・クリークは狭められ埋まっていった。しかしこの河川による水喧嘩も、水田に灌漑用の電気ポンプが完成以来完全に解消されて嬉しい限りである。この毎年毎年しかも何十年も続いた「水喧嘩」も時代と共に消え失せ、ただ想い出深い昔語りとして残るのみとなった。



かんかん石

飯盛八幡神社の南方の鳥居から東へ約五〇メートルの道路端に、二つの石碑が建っている。その西側のは高さ二メートル位の石塔であるが、石で叩くとかんかんと音を出すことから「かんかん石」の愛称がある。一見して素朴な中にも気品豊かな石碑であって、農村には珍しい存在である。右側のは安永七年に建てられ施主は当時の庄屋忠左エ門であり、左側のは安政三年に江川甚兵衛・御厨新吉等が施主となって建立している。建立の由来について古老に聞いても全く不明で、調査の方法もなく、それが「かんかん石」の特徴かも知れない。

一九 大野

大野は本町の最西南部に位置する大集落で、現在の世帯数は合計二二二（一区と西区）東与賀町全体の一割五分を占めている。これを職業別に見ると、戦前は大部分が農業であったが、今日では約半数の一・一六に減じ、建設（大工・ブロック・土木建築等）が二八の一割二分、次いでサービス業（商店その他）が二四の一割その他卸小売・運輸通信・水産業・製造業等で年々と多様化の傾向にある。

この大野に因んで佐賀県干拓史（坤）の「與賀地区の干拓」の記事の中に、「大野土井石垣」についての記録が載っている。その一部を要約したい。

大野 即ちこの土井筋二〇町余の地域は、藤津郡竹崎の真北に当たり有明海では一番風当たりが強く、渦のもとになる葭も生えない場所である。正徳年間（一七一五年）の頃暴風と高潮のため、大野・住吉は言うまでもなく、鹿